

# 六大と赤白二諦

——真言密教思想における胎生学的教説の意義——

龍谷大学非常勤講師

亀山隆彦

## 序論

平安の末期以降、真言・天台の両密教僧は『理趣経』『瑜祇経』といった密教経典に加えて、『大宝積経』『俱舍論』『大毘婆沙論』さらに『摩訶止観』等の記述を参照し、女性の子宮内における胎児の発生と成長に関して独自の教えを練り上げてきた。いわゆる今日の学界で、「赤白二諦」や「胎内五位」説の名でもって総称されることの多い教理言説のことである。それらはしばしば「邪流」「邪義」と呼ばれ、日本の仏教界より排除されかけたが<sup>①</sup>、基本的に平安末期から室町時代を通じて、修法から經典の解釈学にいたる日本密教の様々な領域で、小さからぬ影響力を發揮したと考えられる。

さて表題からも明らかのように、本論の主題は、日本密教が育んだこれら胎生学的教説である。具体的には平安末期に活躍した密教僧で、真言宗の中興の祖ともみなされる覚鑿（一〇八五―一一四四）が残した著述を主な検討対象とし、平安末期から鎌倉期の同宗で、胎生に関する一連の言説がいかなる思想的意義を有していたかを考察する。

日本密教における胎生学といえは、古くは水原堯榮氏<sup>②</sup>、守山聖真氏<sup>③</sup>、榎田良洪氏<sup>④</sup>、近年では小川豊生氏<sup>⑤</sup>、ルチア・

ドルチュエ氏<sup>(6)</sup>、James H. Sanford 氏がまとめた論考を発表している。それら論考を通じて、前述の胎生学的教説が、真言僧が「瑜伽」(yoga) と「曼荼羅」(mandala) の意義を深く理解し、「自身本仏之道理」(自らの身体が本来的に仏身そのものである道理) を固く信じるために不可欠であったことが明らかとなった。他方、本論文では、これら先行研究で取り上げられることのなかった、覚鑿の主著とも目される『五輪九字明秘密釈』中の記述を主な検討対象とし、次の事実を解明する。赤白二滯や胎内五位といった胎生学的教説は、真言密教の「即身成仏」なかでも「六大縁起」の教えと密接に結びついていたと推測される。

中村元氏の言葉を借りれば、我々の「現実の迷いの生存」がいかなる理由でこのように存立しているか、換言すればそれが何に基づき成立しているか「ゆえんを考察して明らかにし」、「その根本の条件を減らすこと」によって我々の「迷いの生存」も減ぼし得ると教えるのが、すなわち仏教における縁起の教えである<sup>(8)</sup>。前述の先行研究では特に強く意識はされなかったようだが、原始経典の成立期に、仏教の中に胎生に関する一連の教説がもちこまれて以来、それは縁起の思想と強く結びついてきた。この点に関して、Frances Garrett 氏は次のように総括する。

仏教徒は、人間経験の様々な領域で変化と進歩がどのように起こるか記述することに、その歴史を通じて関わってきた。そのような哲学的な構想を明瞭に定義し、それらを仏教思想・実践のシステムに統合する行為は、インドにおけるもつとも初期の起源の頃より仏教にとって中核的なものであり、胎生学的なナラティブ (narratives) は、これら難解な構想を表現する上で注目せずにはいられない重要な手段としてなった<sup>(9)</sup>。

古典的な仏教の胎生学的知識では、第一に性交を通じて男女それぞれの精子と卵子(赤白二滯)が結合し、さらにそこに「中有」の状態の「識」が託された結果、「羯羅藍」(和合, kalala) と呼ばれる受精卵が女性の子宮内に形成

される<sup>10)</sup>。これが懐胎のメカニズムである。続いてその「羯羅藍」⇨受精卵は、さらに「頰部曇」(皗、*ambuda*)、<sup>11)</sup>「閉尸」(血肉、*pesti*)、<sup>12)</sup>「健南」(堅肉、*ghana*)、<sup>13)</sup>「鉢羅奢佉」(支節、*pasakha*)の四階梯(胎内五位)を経て、四肢を具えた胎児に成長し、出産へいたる(胎外位)。

Garrett氏によれば、このような知識は単に「医学」であるだけでなく、「人間経験の様々な領域」で種々の形をとって起る「変化と進歩」、つまり縁起という哲学的コンセプトを「明瞭に定義」し、さらに「仏教思想・実践のシステムに統合する」ために、不可欠の手段であった。

基本的に、Garrett氏の考察対象に、日本密教とその胎生学的教説は含まれていない。だが真言密教の「胎生学的なナラティブ」についても、開祖である空海(七七四〜八三五)が提唱した六大「縁起」の思想と強く結びついていたと指摘できる。詳しくは後述するが『五輪九字明秘密釈』では、人体発生の源にある三つの要素、つまり父⇨男の白滯(精子)、母⇨女の赤滯(卵子)、そして中有の状態にある識のそれぞれに、地水火風空識の六大を三つに分割して配当し、それら三要素の「和合」を同じく六大の結合とみなす。『瑜祇経十二品大綱』のような文献をみれば、六大と胎生学的教説の結びつきは一人覚鑊だけの構想ではなく、鎌倉以降の真言僧も、広く同様の思想を共有していたと知れる。

偽書とも目される『自身観』を除けば、胎生に関する覚鑊の言説は、『五輪九字明秘密釈』と『覚鑊聖人伝法会談義打聞集』に記録される。本論では、これら二書と『瑜祇経十二品大綱』の検討を通じて、真言密教における胎生学的教説と六大思想の結びつきを闡明する。論文の構成は次の通りである。第一章では、『覚鑊聖人伝法会談義打聞集』の胎生学的教説がいかなるものか明らかにする。その結果を踏まえて、第二章で『五輪九字明秘密釈』の同教説について考察を試みる。そしてそれら考察の成果を踏まえ、第三章で『瑜祇経十二品大綱』の胎生学的教説を概観する。

## 一 『覚鑿聖人伝法会談義打聞集』における赤白二諦と胎内五位

本章で取り上げる『覚鑿聖人伝法会談義打聞集』（以下『打聞集』）は、平安末期の真言僧、聖応（生没年未詳）による覚鑿の伝法会談義の聞き書きである。覚鑿は大治五年（一一三〇）から康治二年（一一四三）にかけて、高野山の大小伝法院および根来豊福寺で、計一五回ほど伝法会談義を実施している<sup>(12)</sup>。聖応は覚鑿の高弟の一人として、それから談義に余さず出席し、さらにその内容について詳細な記録を残した<sup>(13)</sup>。この聖応の記録の集成が、すなわち今日我々の知る『打聞集』である。

次にそれら伝法会談義で何が題材にされたかという点、聖応『打聞集』を見る限り、第一に『弁頭密二教論』『声字実相義』『即身成仏義』『秘密曼荼羅十住心論』（以下『十住心論』）といった空海の著作であり、また『菩提心論』『釈摩訶衍論』等の文献が取り上げられることもあったようだ<sup>(14)</sup>。保延五年（一一三九）春、高野山で開催された伝法会談義では、『十住心論』巻一〇「秘密莊嚴心」の内容がその題材とされた。そしてこの『十住心論』談義の最中に、覚鑿は「羯羅藍」「赤白二諦」、そして胎内の「五位」のような胎生学的知識に関する議論を展開した。次に引用する文の通りである。

又云種子者、且如下入胎内一時、羯羅藍赤白二諦和合上。如露円形也。赤色曠恚之色、白色慈悲色。仏心大慈悲為<sup>ラ</sup>体、故其色白。菩提心論於<sup>ニ</sup>内心中、觀<sup>スト</sup>日月輪云。赤白二諦義亦在<sup>レ</sup>之。雖然凡夫位二種和合、成仏時唯白色也。故仏心如滿月云。亦滿足淨白淳淨法云。二種和合之義、凡夫赤色之内、本性清淨仏性有故、二種和合、表<sup>ス</sup>此義。吾具縛身内、有<sup>二</sup>大悲毘盧遮那如来種子。是名<sup>ニ</sup>《van》字<sup>一</sup>。（中略）此円形漸經五位間、

支節出生<sup>スルト</sup>。此<sup>ハ</sup>三昧耶形、五輪卒塔婆也。此卒塔婆、漸漸莊嚴<sup>シテ</sup>、成<sup>ル</sup>形像<sup>ト</sup>、是如<sup>シ</sup>胎外位<sup>ト</sup>。是曰<sup>フ</sup>種子三昧耶尊形<sup>ト</sup>也。《a》等<sup>ノ</sup>五字即五仏也。其中第五《amh》字用<sup>ニ</sup>阿弥陀種子<sup>ト</sup>時<sup>アリ</sup>。第四《ai》字、不空成就種子用<sup>ニ</sup>。此時<sup>ハ</sup>隋義転用也。<sup>(16)</sup>

聖応と同じく、覚鑊の高弟の一人と考えられる兼海（生没年未詳）が残した伝記『覚鑊上人事』によると、覚鑊はうち続く高野山上の騒乱に心を痛め、長承四年（一一三五）一月一日（また三月二日）より、保延五年四月二日までのおよそ一五〇〇日間、あらゆる「縁務」を捨てて密厳院上院に籠居し、外界との交渉を断つて「即身成仏之密行」に集中した。保延五年の春は、まさにこの「無言行」の満願の時期に当たる。<sup>(18)</sup>

藤井佐美氏の分析に従えば、右の引用文は、保延五年五月七日の談義中に記録されたと考えられる「護身法・振鈴加持、事相に関する口決」の直後に記載されるものである。<sup>(19)</sup>「又云<sup>ッ</sup>」以下、種子・三昧耶・尊形の、いわゆる「種三尊」の転成の次第と、胎内五位の初位である羯羅藍（*kalala*）から第五位の鉢羅奢佉（*prastakha*）、そして「胎外位」へ至る過程間の対応が説き示される。

また引用文の文脈について、小川豊生氏は「五相成身」についての講義内容<sup>(20)</sup>と解説する。たしかに「種三尊」の転成の次第は、五相成身観を含む様々な密教瞑想法の主要な観想対象であり、引用文に前後して本五相成身観への言及が散見されることを鑑みれば、<sup>(21)</sup>右記の小川氏の見解をそのまま受け入れても良いのかもしれない。

ところが先の引用文内に、五相成身観との直接の関連を指し示す記述は、種三尊以外、基本的に見いだされず、他方、それが「十住心論」巻一〇の「種子」の語の解釈である可能性も残る。<sup>(23)</sup>あるいは、その両方の意を含んでいるとも考えられるが、果たして何れの理解が妥当なのだろう。残念ながら、この問いに明瞭に答えうる論拠は、今のところ『打聞集』にも他の文献にも見いだされない。したがって、本論ではひとまず明言を避け、今後の検討課題として

残しておきたいと思う。

いささか前置きが長くなったが、以下、『打聞集』に記録される覚鑿の胎生学的知識に関する議論について考察を進めていく。

第一に「種子」は、性交を通じて男女それぞれの赤白二滯が「和合」し、結果、女性の子宮内に形成される「如露<sup>レ</sup>円形」な羯羅藍に準えられる。赤白の二色は、それぞれ瞋恚と慈悲を象徴する色で、したがって二滯の和合はまた、「凡夫赤色」に内在する「本性清淨<sup>レ</sup>仏性」を意味している。それは煩惱に縛られた我々の身中に、「大悲毘盧遮那如来種子」が存在する、ということでもある。覚鑿によればこの種子<sup>レ</sup>羯羅藍は、さらに《*yanu*》字と名付けられる。

さて赤白二滯が和合した羯羅藍<sup>レ</sup>種子は、その後、頰部曇 (*arbuta*)、閉尸 (*pesti*)、健南 (*ghanu*)、鉢羅奢佉という胎内五位の残り四位を経過する中で、単純な円形からより複雑な形状に徐々に変化し、最終的に「支節」(＝四肢を含む身体の各部位) を具えた人間の姿になる。この状態は、種子に続く三昧耶形に比較される。引用文に登場する「五輪卒塔婆」とは、すなわち「大悲毘盧遮那如来」(＝大日如来) の三昧耶形である。

さらに三昧耶形である五輪卒塔婆が「漸漸」に「莊嚴」されて、最終的に大日如来の尊形になる。これは、右記の五位すべてを経過して出産にいたる、いわゆる「胎外位」に該当すると説明される。

以上、覚鑿の理解では種子から三昧耶形、そして尊形へ変化していく転成の次第は、そのまま女性の胎内における人体の発生と成長の過程に比較される。このような『打聞集』の胎生学的教説の歴史的意義について、先述の小川氏は次のようにも発言する。

この覚鑿の胎内五位説は、すでに本書Ⅰ―第二章で触れた勸修寺の寛信のそれとともに日本において五位説が書

き留められた初見といふべきものである〔3〕。寛信のそれが経論書の祖述にとどまるのに対し、覚鑿においては断片的であるにもかかわらず独自の解釈の深まりを見せている。<sup>(24)</sup>

小川氏のいう「勸修寺の寛信のそれ」とは、寛信（一〇八四〜一一五三）作『小野類秘鈔』巻六の「胎内五位」と「懷妊十月次第」に記載される、種々胎生学的言説を指す。<sup>(25)</sup> すなわち『小野類秘鈔』と『打聞集』のそれぞれに記録される胎内五位説、あるいは赤白二滯は、日本仏教における本説の「初見」とみなされるといふ。小川氏の評価は、まったく妥当なものと考えられる。加えてこのような覚鑿の主張の延長線上に、例えば『瑜祇経口決』や『注理趣経』の「五位図」等、鎌倉期の真言僧が残した胎生学的教説が位置するとも想像される。<sup>(26)</sup>

## 二 『五輪九字明秘密釈』における六大と胎生学的教説

### 1 『五輪九字明秘密釈』の概要

続いて前章の結果を踏まえて、覚鑿『五輪九字明秘密釈』（以下『五輪九字秘釈』）に独自の胎生学的教説について考察を進めていく。その具体的な作業の前に先ず本節で、『五輪九字秘釈』の製作時期、主題、および構成について改めて確認しておきたい。

第一に『五輪九字秘釈』の製作時期だが、これは那須政隆氏が明らかにしたように、<sup>(27)</sup> 永治元年（一一四一）三月から康治二年（一一四四）一二月までの何れかの時期と末尾の識語より推定される。また櫛田良洪氏が指摘するように、<sup>(28)</sup> 覚鑿が最晩年「五蔵曼荼羅」の観想に集中していたのだとすれば、同曼荼羅の詳細が説かれる本書『五輪九字秘釈』はその死の直前、康治元年ないし二年の著述である公算が高い。<sup>(29)</sup> すなわち前章で言及した保延五年の伝法会談義

から数えて、およそ四〜五年後に製作されたと考えられる。同じく先行研究では、このような『五輪九字秘釈』の背景を考慮して、覚鑿が心血を注いで完成させた、同僧の代表的著作と主張することもしばしばである。

次に主題について述べると、「五輪九字明秘密釈」という表題からも容易に推測されるように、大日如来の《a》《va》《ra》《ha》《kha》の「五輪」と、阿弥陀如来の《om》《a》《mi》《ra》《te》《se》《ha》《ra》《hum》の「九字明」の「秘密釈」が、本書『五輪九字秘釈』全体に通底するテーマといえる。覚鑿は、主に右記の二真言の「秘密釈」を明らかにするために、この『五輪九字秘釈』を著した。

平安中期以降、浄土信仰はその影響力を徐々に強め、同時代の末頃には真言宗内にも、阿弥陀仏の極楽浄土への往生を願う修行僧が、少なからず存在したといわれる<sup>(30)</sup>。覚鑿自身、彼ら修行僧達と強い結びつきを維持し<sup>(31)</sup>、『五輪九字秘釈』はその影響下で製作されたとも推測される。ただ覚鑿の阿弥陀、および極楽浄土理解は、従来のそれとかなり異なっており、たとえば『五輪九字秘釈』冒頭には、阿弥陀仏と大日如来の関係性に関する次のような主張が確認される。

顕教 釈尊之外有<sup>(ニ)</sup>弥陀<sup>(ハ)</sup>、密藏 大日即<sup>(チ)</sup>弥陀極楽教主<sup>(ナリ)</sup>。当<sup>(レ)</sup>知<sup>(ル)</sup>、十方浄土皆<sup>(ハ)</sup>是一<sup>(ノ)</sup>化土<sup>(ハ)</sup>、一切如来悉<sup>(ハ)</sup>是大日<sup>(ナリ)</sup>。毘盧弥陀<sup>(ハ)</sup>同体異名<sup>(ハ)</sup>、極楽密藏名異<sup>(ハ)</sup> 一<sup>(ナリ)</sup>処<sup>(ニ)</sup>。<sup>(32)</sup>

真言密教の視座に立てば、一切如来はみな例外なく大日如来なので、大日と弥陀の二仏は「同体異名」であり、各々の密厳・極楽・浄土も「名異<sup>(ニ)</sup>一<sup>(ニ)</sup>処<sup>(ニ)</sup>」である。引用文中、覚鑿はこのように明言する。先行する源信(九四二〜一〇一七)、あるいは後代の法然(一一三三〜一二二二)、親鸞(一一七三〜一二六三)のそれとも全く異なる阿弥陀ないし極楽浄土理解である。胎生学的教説とは別に、こういった覚鑿独自の弥陀浄土観も、後代に小さからぬ影響を

残したと指摘される。

本節の最後に『五輪九字秘釈』の構成を確認しておく、同書は次に紹介する一〇章と、序言および結語より成る。一〇章とは、すなわち①「摂法権実同趣門」、②「正入秘密真言門」、③「所獲功德無比門」、④「所作自成密行門」、⑤「纒修一行成多門」、⑥「上品上生現證門」、⑦「覚知魔事対治門」、⑧「即身成仏行異門」、⑨「所化機人差別門」、⑩「発起問答決疑門」である。本章で検討する胎生学的教説は、この中、第二章にあたる「正入秘密真言門」で述べられる。

合わせて『五輪九字秘釈』『正入秘密真言門』の内容について概説しておく、本書の主題である五輪と九字真言の秘密釈、つまり両真言の曼荼羅が教示される。先述の那須氏によれば、覚鏝が「当秘釈を述作された眼目」は、「五輪九字の曼荼羅観」を闡明する点にあった。したがって「正しく五輪と九字の曼荼羅観が説かれ」る「正入秘密真言門」は、『五輪九字秘釈』にとって「最も重要な部分」であり、それ故、本書「一部の大半を占めている」のだという。<sup>(33)</sup>

那須氏のいう「五輪」の「曼荼羅観」は、研究者によっては「五蔵曼荼羅」と呼称されることも多い。頼富本宏氏の言葉を借りれば、「ほとけに象徴される大宇宙と五臓六腑から構成される身体小宇宙の相似を意図」した、五輪・五輪・五仏を中心とする様々な「五部法門」間の相応関係のことである。詳しくは後述するように、『五輪九字秘釈』『正入秘密真言門』では、この五蔵曼荼羅を説き示す中で、独自の胎生学的教説に触れる。換言すれば同教説も、右の「五輪曼荼羅観」＝五蔵曼荼羅の一部とみなされる。

『五輪九字秘釈』における「五部法門」の相応図(一部)

|    |     |      |      |      |      |
|----|-----|------|------|------|------|
| 五臟 | 肝   | 肺    | 心    | 腎    | 脾    |
| 五輪 | 《a》 | 《va》 | 《ra》 | 《ha》 | 《ka》 |
| 五大 | 地   | 水    | 火    | 風    | 空    |
| 五方 | 東   | 西    | 南    | 北    | 中央   |

|        |        |        |        |       |       |
|--------|--------|--------|--------|-------|-------|
| 五臟     | 肝      | 肺      | 心      | 腎     | 脾     |
| 五行(本覚) | 木      | 金      | 火      | 水     | 土     |
| 五色     | 青      | 白      | 赤      | 黒     | 黄     |
| 本覚     | 《hūm》  | 《hrīh》 | 《trāh》 | 《ah》  | 《van》 |
| 能破     | 《hrīh》 | 《trāh》 | 《ah》   | 《van》 | 《hūm》 |
| 五仏     | 阿闍     | 阿弥陀    | 宝生     | 不空成就  | 大日如来  |
| 五智     | 大円鏡智   | 妙觀察智   | 平等性智   | 成所作智  | 法界体性智 |

2 『五輪九字明秘密釈』と『破地獄儀軌』

ところで『五輪九字秘釈』「正入秘密真言門」の内容、特に五藏曼荼羅の記述について、那須政隆氏は次のようにも指摘する。

（前略）最も直接的な所依となつたものは、善無畏訳の破地獄儀軌であるといわねばならぬ。五輪曼荼羅（※五藏曼荼羅）の一節中には、破地獄儀軌の文章が、そのまま引用せられ、しかもそれが一節の主要点を占めているのであるから、該軌が如何に重要な役割を、演じているかが、察知せらるるであらう。<sup>(35)</sup>

引用文中の「善無畏訳の破地獄儀軌」とは、今日、善無畏三藏（六三七―七三五）の翻訳として相伝される『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』（以下『破地獄儀軌』）を指す。那須氏によれば『五輪九字秘釈』『正入秘密真言門』は、『破地獄儀軌』を「所依」に著された。「五輪曼荼羅」（＝五藏曼荼羅）の記述の中には、この『破地獄儀軌』の文が「主要点」としてそのまま引用される。このような『破地獄儀軌』と『五輪九字秘釈』の間の強い結びつきについては、同じく吉岡義豊氏も次のように主張する。『五輪九字秘釈』の「五藏観」（＝五藏曼荼羅）は「多少の修正や改作」はあるが、基本的に「『破地獄儀軌』を主要な材料として、それにもとづいて書かれたものである。」<sup>(36)</sup>

したがって吉岡氏も強調するように、『五輪九字秘釈』が説く「五藏観」＝五藏曼荼羅も「密教の中に受け入れられたのは中国において」であり、決して「覚鑿上人にはじまるものではない。」<sup>(37)</sup>であれば、その「五藏観」の一部として明かされる胎生学的教説も、『破地獄儀軌』からの引用、ないし同書に基づき記されたもので、同じく覚鑿に「はじまるものではない」可能性も考えられる。同説の具体的な検討に入る前に、先ずこの問題を解決しておく必要がある。

結論からいうと、『五輪九字秘釈』『正入秘密真言門』に明らかにされる胎生学的教説は、たしかに五藏曼荼羅の一部だが、『破地獄儀軌』からの引用でもそれに基づく記述でもなく、基本的に覚鑿自身の構想と推定される。そのように推定される根拠がどこにあるかという点、次に引用する文の通りである。

覚鏝『五輪九字秘釈』

復次《㊦》字金剛部阿闍、主肝藏眼識。所謂《㊦》字即是大日如来理法身自性清淨畢竟不生不可得空。大悲地輪種子金剛部曼荼羅也。若約色法者、地是色法。五陰中識陰心持地。施其種子不淨、地識動取能招愛有一。風空能犯之体、火地所犯之門。水空識種子下住子宮中、悉成五藏。

善無畏『破地獄儀軌』

仏言《㊦》阿字金剛部、主肝。阿字即是大日如来理法身本性清淨極理畢竟不可得空。金剛地輪種子金剛部曼荼羅也。若約名色者地是色法。五陰中識陰心持地。其種子不淨。凡五藏者是色法也。五陰中識陰心發、故、約名色地是色法也。

胎生学的教説を含む『五輪九字秘釈』「正入秘密真言門」の一連の記述と、その「所依」になったと考えられる『破地獄儀軌』の文を合わせて引用した。第一に『五輪九字秘釈』内の胎生学関連の記述を太字とし、続いて、両書の内容が完全に一致する箇所傍線を引いた。すると、次の事実が明らかとなる。太字と傍線箇所は一切重ならないのである。このことから、『五輪九字秘釈』の胎生学的教説は『破地獄儀軌』の引用ではなく、覚鏝が自ら構想し、記述したものと主張しうるのである。

3 『五輪九字明秘密釈』における六大と胎生学的教説

以上の考察を踏まえて、覚鏝『五輪九字秘釈』「正入秘密真言門」で教示される胎生学的教説がいかなるものか検討する。先ずは同説について述べた『五輪九字秘釈』の文を、今一度引用しておく。

復次《〇》字、金剛部阿闍ニシテ、主ル肝藏眼識ヲ。所謂《〇》字即是大日如来理法身自性清淨畢竟本不生不可得空ノ。大  
悲地輪種子金剛部曼荼羅也。若約サハ色法ニ者、地ハ是色法ナリ。五陰中識陰ノ心持レ地ヲ。施セ其種子不淨ニ、地識動取能  
招ツ愛有ヲ。風空能犯之体ニシテ、火地所犯之門ナリ。水空識種子下住ニ子宮中ニ悉成ニ五藏ヲ。<sup>(40)</sup>

前節同様、胎生学的教説に關係する箇所を太字とした。引用文は、大日如来の五輪真言の一である《〇》字の秘釈、  
那須氏の言う「五輪曼荼羅觀」、吉岡氏のいう「五藏觀」、つまり五藏曼荼羅の一部を説き示すものである。繰り返す  
が胎生学的教説は、この曼荼羅思想の一部として明らかにされる。

ところで前章で検討した『打聞集』のそれとはいささか異なり、引用した『五輪九字秘釈』の文には、赤白二滯、  
羯羅藍、ないし胎内五位といった用語や概念が一切登場せず、一見しただけでは、真に胎児の発生と成長について述  
べた文かそうでないか明瞭でない。この点に関して補足しておく、隆瑜（一七七三〜一八五〇）『五輪九字明秘密  
釈拾要記』に、次のような主張が見いだされる。

識動所能招ク愛有ヲ。風空能犯之体大地所犯門、水空識種子下ニ於子宮之中ニ悉成ニ五藏ヲ已上。意明依ニ父母交會因  
緣ニ下ニ不淨種子子宮之中ニ而作ル五藏ヲ也。已上寂師。<sup>(41)</sup>

『五輪九字明秘密釈拾要記』（以下『拾要記』）は、江戸末期の真言僧、隆瑜による覚鑿『五輪九字秘釈』の註釈書  
である。本書『拾要記』では「識動所能招ク愛有ヲ」以下、先に太字とした『五輪九字秘釈』の文を註釈して、次のよ  
うに解説する。それらは「父母交會因緣」を通じて、「不淨種子」を女性の「子宮」内に下し、肝肺心腎脾の「五藏」  
を形成する過程を指す。つまり男女間の性交渉に基づく懷妊と、それに続く胎生のプロセスに関する記述と明言され

るのである。<sup>(42)</sup> 他方、那須氏も、人体が「色心の合一<sup>(42)</sup>体」であることを究めるために展開された、「託胎の原初」に関する考察と主張している。

さて『五輪九字秘釈』の文の内容を解説すると、第一に「愛有」の語是那須氏が明らかにする通り、死有の後、中有の状態にある識が、父母の交会とそれに伴う白滯（精子）と赤滯（卵子）の和合を見て、自らのものと強く思念し、最終的にその和合物の中に留まろうとする状態を指す。<sup>(43)</sup> その点から続く「能犯之体」と「所犯之門」の語は、それぞれ父Ⅱ男とその白滯、および母Ⅱ女とその赤滯であり、同じく「水空識種子」は、その父母の交会を見て「愛恚」を起こす中有の識であると推測される。<sup>(44)</sup> そして、それら三者が一体となつて子宮内に下り、そこに留まるものが何かといえば、前述の羯羅藍である。

また『五輪九字秘釈』では、「能犯之体」「所犯之門」「種子」それぞれの語の前に、「風空」「火地」「水空識」の字が付記される。改めて確認するまでもないが、これら六字は地水火風空識の六大を指す。六大が何なのか簡単に述べておくと、空海『即身成仏義』に次のように解説される。六大とはあらゆる仏・衆生と、彼らが住まう環境世界（三種世間）、さらに自性・受用・変化・等流の四種法身から、大法三羯の四種の曼荼羅までも生み出す「能生」の存在である。さらにあらゆる仏・衆生から曼荼羅にいたる、法界の全構成要素を生み出す根源と、いうことで、『即身成仏義』では「法界体性」とも呼称される。<sup>(45)</sup>

覚鏤『五輪九字秘釈』ではこれら六大を三つに分割し、それぞれ「能犯之体」「所犯之門」の白赤二滯と、「種子」に配当する。すなわち「能犯之体」の白滯は風と空の二大、「所犯之門」の赤滯は火と地の二大、「種子」Ⅱ中有の識は水と識の二大である。それら三つが和合し羯羅藍が形成されると、六大のすべても一つになることが出来る。羯羅藍は、その後、母の子宮内で徐々に成長し、肝肺心腎脾の五臓を含む人体の各部位が形作られる。『五輪九字秘釈』ではそうやって生まれる五臓について、次のようにも主張する。

一切衆生色心実相、無始本際、毘盧遮那平等智身。色者色蘊、開為五輪。心者識大、合為四蘊。是則六大法身法界体性智。(中略) 色者不離心五大即五智。心者不離色五智即五輪。(中略) 色心不二故五大即五藏、五藏即五智。<sup>(46)</sup>

五臓は色法（＝五大）と心法（＝識大＝五智）のちょうど中間に位置し、それら二法の不二という、真言密教の究極の理想を象徴する存在とみなされる。また色心の二法が不二となった五臓は、『大日経疏』で大日如来の活動相として紹介される「毘盧遮那平等智身」<sup>(47)</sup>であり、さらに大日如来の「六大法身」と同一視される。

### 三 『瑜祇経十二品大綱』における六大と赤白二滌

最後に、前章で取り上げた胎生学的教説と六大の結びつきが覺鑊『五輪九字秘釈』のみならず、さらに後代の文献にも見いだされることを確認し、本論の締めくくりとする。具体的には、『瑜祇経十二品大綱』（以下『十二品大綱』）の赤白二滌説について検討を試みる。すなわち『十二品大綱』では赤白二滌の和合に言及する際に、平行して地水火風空識の六大の結合にも触れ、『五輪九字秘釈』のそれより踏み込んだ両者の対応関係を教示する。その点を本章で明らかにする。

具体的な検討の前に、先ず『十二品大綱』がいかなる文献か概観しておく、本書は、金剛智（六六九～七四一）訳と伝えられる『瑜祇経』全一二品の注釈書である。今日、金沢文庫に、称名寺第二代劔阿（一二六一～一三三八）の手沢本が伝えられるが、同僧の記述によるとこの『十二品大綱』は元々、三輪山宝篋上人慶円（一一四〇～一二二三）の弟子の一人、智泉房弘鑊（生没年未詳）の流れを汲む秘密口伝である。<sup>(49)</sup>したがって、鎌倉以降の成立なのは間

違いない。

さて本書『十二品大綱』では、『瑜祇経』の第七章「一切如来大勝金剛心瑜伽成就品第七」の内容を註釈する際、<sup>(50)</sup> 六大や赤白二滯について次のように説く。

相承口伝云、六大者母精是名瞋煩惱。是則本觉性心法是其体本无。但依六大一乘宅。六大若離散、心亦隨離散云々。

又云、於六大「可別色心」。地火風是色法□即成皮肉血脈。是即母赤滯也。水空識是心法也。即成骨髓。是即父白滯也云々。

引用文によると、地水火風空識の六大とは第一に「母精」であり、それらはまた「瞋煩惱」と名付けられる。さらには、六大自体「本觉性」と考えられ、その「体本无」の心法は、実はこの六大に「乘宅」す存在にすぎない。したがって六大が離散してしまえば、合わせて心もまた離散してしまう。

更にこれら六大は、色法の「地火風」と心法の「水空識」に二分割される。その中、第一のグループの地火風の三大は、母の赤滯に相応し、人体の中の「皮肉血脈」を形作る存在と考えられる。第二のグループの水空識の三大は、父の白滯に相応し、こちらは「骨髓」を形作る存在と主張される。

以上、右に述べるような六大と赤白二滯に対する口伝が、鎌倉時代に慶円、弘鏡、そして劔阿へと相承されていたのである。

## 結 論

以上、三章に亘り、『打聞集』『五輪九字秘釈』『十二品大綱』それぞれの胎生学的教説を検討してきた。その結果を以下に列挙する。

①『打聞集』によれば、覚鑿は『十住心論』卷一〇を主題とした伝法会談義の最中に、種子・三昧耶・尊形の転成の次第と羯羅藍から鉢羅奢佉までの胎内五位、さらにそこから胎外位へ至る過程が完全に一致すると主張した。すなわち種子は羯羅藍、三昧耶形は鉢羅奢佉、尊形は胎外位である。

②『五輪九字秘釈』によれば、六大は風と空、火と地、水と識の三つに分かれ、それぞれ「能犯之体」〓父の白滯、「所犯之門」〓母の赤滯、そして「種子」〓中有の識に対応している。したがって、父母の交会を通じて三者が和合し、羯羅藍が形成されると、合わせて六大も一つになり、そこから五臓を含む身体の各部位が生じる。それ故、五臓は色心不二の毘盧遮那平等智身、六大法身とも理解される。

③『十二品大綱』によれば、六大は地火風と水空識の二グループに分割され、前者は母の赤滯に相応する色法、後者は父の白滯に相応する心法に該当する。さらに、第一の地火風は人間の皮や肉や血管を形作る存在で、第二の水空識は、骨髓を生み出す存在と考えられる。

②と③の結果より、平安末期以降の真言宗では、人間の胎生にまつわる一連の教説は、他方で六大縁起の思想とも深く結びついていたと理解される。本論の最後に、その意義について少し考えておく。それは序論で紹介した Grathoff 氏の言葉を借りれば、おそらく次のようにまとめられる。『五輪九字秘釈』そして『十二品大綱』で試みられるのは、空海が提唱した六大縁起という哲学的コンセプトを「明瞭に定義」し、さらに、真言密教の「思想・実践のシステムに統合する」思想的営みそのものである。

第一に空海『即身成仏義』を読めば明らかのように、そこで主張される六大縁起は、高度に観念・抽象的な縁起思想であり、それでもって具体的な「変化と進歩」、そして生成のイメージを抱くのは極めて難しいといわざるを得ない。その一方で人体がいかに変化・進歩し、いかに生まれてくるか正しく理解することは、序論で触れた「自身本仏之道理」を固く信じる行為、つまり真言密教が主張する即身成仏の奥義と深く結びついている。

そこで覚鑿を筆頭とする後代の真言僧は、この懸隔を別の思想的方法で埋めようと考えた。すなわち観念・抽象的な空海の六大縁起に、様々な胎生学的教説を導入し、前者に基づく変化・生成イメージの具象化を試みたのである。そのような点で胎生学的教説はまた、真言密教教理における種々の仲介項 (mediation) とみなされる。それは深遠な六大縁起の宇宙と、実際に肉体を持って生きる修行僧の日常のちょうど中間に位置し、両者の架橋を期待される存在であったと考えられる。

〈キーワード〉

胎内五位、赤白二滯、覚鑿、『五輪九字明秘密積』、『覚鑿聖人伝法会談義打問集』

注

- (1) 守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』(東京：鹿野苑、一九六五年)、柳田良洪『真言密教成立過程の研究』(東京：山喜房仏書林、一九六四年)、および、真鍋俊照『邪教・立川流』(東京：筑摩書房、一九九九年)参照。
- (2) 水原堯栄『邪教立川流の研究』(京都：全正舎、一九二三年)参照。
- (3) 守山前掲書参照。
- (4) 柳田『真言密教成立過程の研究』参照。
- (5) 小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』(東京：森話社、二〇一四年)参照。
- (6) ルチア・ドルチェ『二元的原理の儀礼化―不動・愛染と力の秘像』(『儀礼の力―中世宗教の実践世界』(京都：法蔵館、二〇一〇年)参照。
- (7) James H. Sanford, "Wind, Waters, Stupas, Mandalas : Fetal Buddhahood in Shingon," *Japanese Journal of Religious Studies* vol.24, no.1-2 (1997) 参照。
- (8) 中村元『中村元選集第一六巻 原始仏教の思想Ⅱ』(東京：春秋社、一九九四年)四三五頁参照。
- (9) 詳しくは、Frances Garrett, *Religion, Medicine and the Human Embryo in Tibet* (London : Routledge, 2008) p.127 参照。原文は次のとおりである。"Buddhists throughout history have concerned themselves with describing how change and development occur in the various realms of human experience. Defining such metaphysical concepts and integrating them into systems of thought and practice is central to Buddhism from its earliest origins in India, and embryological narratives turned out to be a compelling means of expressing these difficult concepts."
- (10) たとえば、『瑜伽師地論』巻一の「爾時父母貪愛俱極」以下の記述(『大正』巻三〇・二八三頁上)参照。
- (11) たとえば『俱舍論記』巻九の「羯刺藍此云和合」以下の記述(『大正』巻四一・一六四頁上)参照。
- (12) 藤井佐美『真言系唱導説話の研究 付・翻刻 仁和寺所藏『真言宗打聞集』』(東京：三弥井書店、二〇〇八年)一五―一六頁参照。
- (13) 藤井前掲書四八―五〇頁参照。
- (14) 藤井前掲書一六頁参照。
- (15) 悉曇については、『内』にローマ字化したものを記載し、その形式でもって表記することを基本とする。

- (16) 富田敦純編『興教大師全集』（東京：世相軒、一九三五年。以下「興全」）巻上・五〇四～五〇五頁。
- (17) 三浦章夫編『興教大師伝記史料全集第一編伝記』（東京：興教大師八百年御遠忌事務局出版部、一九四二年。以下「興伝」）三三八頁参照。
- (18) 同じく兼海『覚鏝上人事』によれば、覚鏝が無言行に入っていた長承四年から保延五年までの四年間、「上人既逝去」つまり覚鏝は既に死去しており、兼海等、弟子がそれを隠しているだけという流言が飛び交うこともしばしばであった。そのような時期に、覚鏝はふたたび大伝法院に姿をあらわし、談義を開催し真言教学の振興に力を注ぎはじめた。その影響力について、榊田良洪氏は「恐らくこのことは高野一山の人達に強烈な刺戟と驚異とを与えたことであろう。覚鏝死すと信じた人達には、まさに青天の霹靂にも等しい事実であった」と推測する。詳しくは『興伝』三三八～三三九頁、および榊田良洪『覚鏝の研究』（東京：吉川弘文館、一九七五年）三五九頁参照。
- (19) 藤井前掲書一六、二六頁参照。
- (20) 小川前掲書四四八頁参照。
- (21) 『密教大辞典 縮刷版』（京都：法蔵館、一九八三年）一〇八三頁中「種三尊」の項参照。
- (22) 『興全』巻上・五〇二～五〇三、および五〇五頁参照。
- (23) 『十住心論』巻十に「法界則達磨曼荼羅身。第二第五所説種子字輪等真言是也」（『大正』巻七七・三六〇頁上）という一文があり、同文の「種子」の語の註釈とも前後の文脈から捉えられる。例えば『興全』巻上・四九四頁の「次秘密莊嚴住心者」以下、四九七頁の「第十住心独句也。故云爾也」までの記述参照。
- (24) 小川前掲書四四九頁。
- (25) 『真言宗全書』（復刊。伊都郡高野町：高野山大学出版部、二〇〇四年）巻三六・六四頁上～六七頁上参照。
- (26) 小川前掲書三〇一～三〇五頁、および四七七～四八一頁参照。
- (27) 那須政隆『五輪九字秘釈の研究』（東京：鹿野苑、一九七〇年）四頁参照。
- (28) 榊田氏によると、「五蔵曼荼羅」を表すと思われる曼荼羅図が、覚鏝臨終の「秘蔵本尊」として金沢文庫に伝わる。詳しくは榊田良洪『続真言密教成立過程の研究』（東京：山喜房仏書林、一九七九年）八四二～八四四頁参照。
- (29) 『五輪九字秘釈』に説かれる五蔵曼荼羅の詳細については、拙稿「『五輪九字明秘密釈』における五蔵理解…覚鏝の成仏論的特質として」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三三三号、二〇一一年）、および「覚鏝の三摩地観の意義」（『龍谷大学

- 大学院文学研究科紀要』三四号、二〇一二年）等参照。
- (30) 柳田『真言密教成立過程の研究』一八一～二二一頁参照。
- (31) 五来重『増補 高野聖（角川選書七九）』（東京：角川書店、一九七五年）参照。
- (32) 『興全』巻下・一一二二頁。  
那須前掲書五頁参照。
- (33) 那須前掲書五頁参照。
- (34) 頼富本宏「密教の受容した五臟説―胎内納人品と覺鑿『五輪九字明秘密釈』を中心として―」（『東方宗教』九〇、一九九七年）八三頁上参照。
- (35) 那須前掲書二頁。（※内は筆者注。
- (36) 吉岡義豊「密教と道教」（『吉岡義豊著作集 第二巻』東京：五月書房、一九八九年）一三六～一三七頁参照。
- (37) 吉岡前掲論文二三六～一三七頁参照。
- (38) 『興全』巻下・一一三九頁。
- (39) 『大正』巻一八・九〇九頁下。
- (40) 『興全』巻下・一一三九頁。  
福田亮成「隆瑜撰『五輪九字明秘密釈要記』の研究（六）―本文翻刻―」（『大正大学研究紀要』九一号、二〇〇六年）一四〇頁下。
- (41) 福田亮成「隆瑜撰『五輪九字明秘密釈要記』の研究（六）―本文翻刻―」（『大正大学研究紀要』九一号、二〇〇六年）一四〇頁下。
- (42) ただし、本記述の内容が隆瑜の個人的な見解ではなく「寂師」の伝であることには、留意する必要がある。
- (43) 那須前掲書一一二二頁参照。
- (44) 那須前掲書一二二～一二三頁参照。ただし、那須氏は「能犯之体」を父⇨男ではなく、「胎中箭」として母胎に入ろうとする中有の識と解釈する。しかし、その解釈では『拾要記』の理解と矛盾をきたすと思われるので、採用すべきでないと考ええる。
- (45) 密教文化研究所弘法大師著作研究会編『定本弘法大師全集』（伊都郡高野町：高野山大学密教文化研究所、一九九四年）巻三・一九～二三頁参照。
- (46) 『興全』巻下・一一三四頁。
- (47) 『大正』巻三九・五八五頁中参照。

- (48) 『金沢文庫資料全書 第六卷 真言篇(一)』(横浜：神奈川県立金沢文庫、一九八二年。以下『金資金』二八九頁下参照。
- (49) 『金資金』二八九頁下参照。
- (50) 『大正』卷一八・二五七頁下～二五八頁上参照。
- (51) 『金資金』一二四頁下。